

ねこの みもの

猫芸通信

第40号
平成十二年
(2000)
7月15日発行
(年4回発行)

連衆心の復活

—二十韻「言霊も」の巻を巡って

二十韻「言霊も」の巻

言霊も風にさやくや樟若葉

夏の燕の翔る蒼穹

使ひ捨てのカメラ子供に持たすらん

ホテルのボーイ客を呼ぶ声

遠く来て佞武多祭を友と見る

野山の錦いよよ深まり

石臼で蕎麦挽いてゐる屋の月

また惚れ直す後姿に

ピアスして男性化粧厚く塗り

壁の陰より覗く猫又

政変は有象無象のおもふつぽ

鞭声肅々兵渡る河

J1とJ2を賭けキックオフ

月にほくほく喰らふ蛸焼

懐の軽さに泣かぬ意地っぱり

東 明雅

膝送り

日高英二

日高 玲

権藤和弥

東 明雅

東 郁子

木村真呂

秋山志世子

佐古英子

中村ふみ

橋朱鷺子

式田和子

高橋豊美

鈴木慎二

玲 英

文殊様さへお仕着せの帽

アル中の弥次喜多揃ふケア・ハウス

夢か現かギターのどかに

昭和史を偲ぶ岬に花散りて

家苞にする浅蜷蛤

平成十二年五月十七日 首尾 於錦糸町英国屋

先日、天神様二十韻奉納の直会に、皆で詠

んだ二十韻「言霊も」の巻、校合されたもの

お送り下さってありがとうございます。

この作品、際立って新しい句もありません

し、特別に深みのある句も見あたりませんが、

一卷を通して一種の風韻と言うか、軽みと言

うかが流れ、そして何よりも、前句は打越を

立て、付句は前句を立てて、全体が協力して

纏った作品を首尾しようという意志がはつき

り窺われるところに感銘しました。

近頃の連句の新しい傾向は、連衆がそれぞ

れ、自分の句の新しさを競い、奇を衒って、

他人が理解しようがしまいが、前句に付こう

が付くまいが、そんなことは知った事ではな

いという作品が多すぎるように思います。ま

た、句上げの数を競って、多いのを誇りにし、

月や花の句を他人に譲る心を失い、初心の人

を助け導く優しさもなく、要するに座の文学

たる連句に取って最も大切な連衆心を失った

作品も多く、それでは座の文学としての本当

の連句は亡びてしまふ外はありません。

それらにくらべて、この「言霊も」の中の

連衆は、お互いに前後の人、前後の句、また

一座の人、一卷の序・破・急、調子をよく考

えて付け進んでおります。それで一卷が滑ら

かに進行し、珠がころんで、全体を通しての

味が生まれているのだろうと存じます。

これは、この作品がいわゆる「出勝」の方

法によらず、「膝送り」の方法で進められた

事によるからだとも思います。「出勝」だと

どうしても他人より多く出句しよう、他人よ

りすばらしい句を出そうという競争心が連衆

心を失わせ、これが一座の落ち着いた気分を

乱し、結果として一卷の中にまとまった風韻

を醸し出すことを拒むのです。

芭蕉の作品集「冬の日」・「猿蓑」・「炭

俵」など、それぞれの作品の中に、「風狂」

・「さび・しおり」・「軽み」などの風韻が

流れ、それが芭蕉の芸術性を醸し出している

が、それらはすべて「膝送り」の方法で作ら

れたものである事を思い出すべきでしょう。

もちろん、「膝送り」でやった事だけでな

く、二十韻奉納を済ませたという共通した満

足感と解放感が、この一座の連衆心を刺激し

たことも考慮すべきでしょうが、兎も角も、

この「言霊も」という作品は、連衆心の復活

の重要性を、私どもに自覚させたと言う点で

貴重な作品だったと思うのですが、英二さん

はいかが思われる所でしょうか。 匆々

五月二十日

東 明雅

余情の復権

窪田素規

荒海や佐渡に横たふ天の河

豪壮といひ雄渾と呼ばれるにふさわしい一句。ここでは、写生を唱導して近代俳句の方向を決定した子規と、流人の島佐渡の歴史と現実の二様の交叉するところに、句の深さをみようとすゝる山本健吉の解を、それぞれ抄出する。

越後の出雲崎より佐渡を見渡したる景色なり。此句を取りて一誦すれば、波濤澎湃天水際涯なく、唯々一孤島の其間を点綴せる光景眼前に彷彿たるを見る。這般の大観銀河を以てこれに配するに非るよりは焉んぞ能く實際を写し得んや。天門中断楚江開の詩は此句を經にして、飛流直下三千尺の詩は此の句の緯なり。思うてここに到れば誰か芭蕉の大手腕に驚かざるものぞ。

山本は、順徳天皇・日蓮上人・日野資朝・世阿弥をはじめとする遠流された貴賤あまたの人々への悲痛な思いを、芭蕉の『銀河序』に指摘、次いで「露の身の島乞食と黒み果て」など芭蕉連句の付合を引き、名もない流

人たちへの作者の共感の深さを語った後、

だからこの句にあつては、佐渡を媒介としての歴史への回想が、同時に鋭い現実への意識をも意味する訳で、さらにまた人間の恒久的な悲痛に対する意識でもあった。―中略―

表現としては単純極まる風景詩でありながら、詩的現実としては決して単純ではない。ここには「佐渡は四十九里波の上」とうたった民謡と同じ庶民的な声さえ聴えてくる。―略―

この句は単に風景に託して旅情を述べたモノローグの詩ではない。同時にそこには、特定されない相手に何か激しく訴えようとする第二の声が響いてくる。

「第二の声」を私にいえば余情、或いは余情に包括されるものだろう。一句の言語表現以外に作者の心情を求めらるる余情しかないからである。

余情を感じ取れないか汲みとろうとしない時、余情は存在しない。子規の鑑賞の可否は別として、句に余情を聞きとっていないのはたしかである。自から写生の立場を鮮明にしているといえよう。しかしそこでは、芭蕉が一句にこめようとした心情がそっくり抜け落ちて、句がすでに表現している壮大な光景を散文化するだけに終るしかない。

例えば「夏草や兵どもが夢の跡」の夏草

は、眼前の叢であると同時に義経主従の悲劇を内に包み、歴史無残の思いを掻き立てるのである。「功名一時の叢となる」と前文に書いた芭蕉には、生い茂るこの夏草の蔭から湧き起る矢叫の音が聞えただろう。そしてその向うには藤原三代の栄華と滅亡を見据えているのである。「国破れて山河あり 城春にして草青みたり」と芭蕉は前文に引いた。夏草は歴史と今と無常を担ってそこに茂っている。即物性を強調し眼前の景物を飽くまで客観視する写生の立場に、この句の解はあるか。

「荒海や」の句へ戻ろう。解は山本に尽きている。付加えるならば句切れの凄さである。この「や」の切れとその深さは、荒海を際立たせているばかりでなく、一句豪壮化の契機であり、芭蕉の佐渡への共感を担つてもいるのである。「荒海やには幾多の哀史を秘めた佐渡が島への悲しい思いが籠っている」と指摘したのは頼原博士。「荒海の」では山本のいう第二の声など聞えようがないのである。この切字を形象への方向だけで捉えるとき、子規解となる。荒海は物象を超えることはいし、「夏草や」の句における夏草は茫々たるただの草むらでしかない。

* 俳句・連句における「余情」については『余情の復権』（窪田素規著 東京四季出版）に詳述。

田一枚植えて立ち去る柳

宮内志乃

芭蕉様の立ち寄られたところは、大抵が観光地として開発され、村おこしに利用されたりして賑やかで味気ない場所となっているが、遊行柳の周りが田圃と山というのにはありがた。 「奥の細道」の風景の中で、ここがいちばん当時の面影を残しているに違いないと思うからである。

六月にしては冷たい風の吹く日であった。植えられたばかりの苗は風が作る細波に消えがちであった。翁がご覧になったものから三代目という柳は枝振りも立派である。吹いてくる風に、枝を水面まで上下しては、左右にある規則をもって揺れている。じっと眺めているうちに、その動きやリズムが、田植えのそれに酷似しているのに気付いた。

米どころで子ども時代を過ごした私には田植は身近な農作業であった。といっても苗を植えるのは家長や跡取りの青年の仕事であり、女衆は苗採り、子どもは苗運びや子守を手伝うのであった。私は女子どもには任せられない田植という神聖な作業を特別な農事として尊敬をもって眺めただけだけれども。

田植は水を張った泥田に大きく足を広げて立ち、ひと尋に五箇所ほど等間隔に苗を植えながら後ずさりするのである。左手に持った

苗束から数本ずつ取って、根を泥の中に埋め込んでいくのである。計ったような正確さで計ったようにリズムカルにである。ちよんちよんちよんと、ただ水に触れているように見えて、きちんと垂直に植えられていく様は、手品のようで見飽きなかった。

田どころを旅された翁も、このちよんちよんちよんをご覧になっただろうなあ、などと考えながら柳を見る。凝視する。

風がまた強くなったように、上下に揺れる柳の枝先が細波立つ水面を突く。左から右へいくつか小さく揺れ、大きく揺れ戻ってはまた水面を突いて後ずさりする。

あつ、柳が田植えている！ 思いがけない柳の揺れ方に嬉しくなってしまった。昔日、田植衆の手に感動して見て飽きなかったように、その日柳の枝が水面に触れながらしなやかに後ずさりするのを見飽きなかった。やがて風はおさまり柳は枝を起こして立ち上がった。田水は平らかになりそれまで波にかき消されていた苗の薄緑がはつきりと見えた。柳が田一枚植えて立ち去ったのである。

田一枚植えて立ち去る柳かな

かくして、この時以来私は、田一枚を植えたのは柳であると信じているのである。

一九九八年六月七日。「奥の細道」によれば、芭蕉様が遊行柳を訪れたのは旧暦の四月二十日、まさにその日であった。

SS 猫蓑会ホーム・ページ SS

去る五月十九日、インターネット上に猫蓑ホームページができました。パソコンをお持ちで、インターネットにアクセスできる環境にある方は、

<http://www.ifnet.or.jp/~nekomino/>

にアクセスしてみてください。内容は東先生が「ねこみの通信」に書かれた原稿を再録したものが中心です。今後拡充し、会員の作品なども掲載していきたいと考えております。ホームページ制作スタッフは、日下悟乃、宮内志乃、井上鶴鳴、井上蘭石です。ご意見ご要望のある方は、これらスタッフにお声をかけていただくか、電子メールを猫蓑宛に送って下さい。

皆様の声で、よりよいページにしていきたいと考えております。宜しくお願い致します。

(鶴鳴)



第十四回藤祭り

奉納正式俳諧

次第

一	席改め	宗匠	大窪 瑞枝
二	席入り	脇宗匠	上月 淳子
三	配硯	脇宗匠	蒲原志げ子
四	献花	副宗匠	橋 文子
五	執筆呼出し	執筆	青木 秀樹
六	文台捌き	知司	島村 暁巳
七	俳諧興行	副知司	久保田庸子
八	花前	同	松本 碧
九	玉串奉奠	座配	日高 玲
十	花の句披露	座見	山口 美恵
十一	端作り	花司	本田 弥生
十二	吟声	配硯	佐古 英子
十三	文台返し	同	橋野代々子
十四	作品奉納	同	市野沢弘子
十五	納硯	老長	
十六	挨拶		
十七	退席		

平成十二年四月二十五日

於 亀戸天神社

奉納正式俳諧

二十韻

詩の神に捧ぐる懐紙藤祭り	明雅
インターネット付けてのどらか	志げ子
鳳蝶ピルの間を遊ぶらん	淳子
水輪絶やさず青深む池	秀樹
はからずも月の末席躍り口	弘子
鰻の造りほめちぎる客	暁巳
草泊 乗馬 自転車 キックボード	碧
幼馴染みとダンスペア組む	庸子
七年目浮気はだめと頬抓り	美恵
おたふく風邪で出るに知られず	弥生
羽搏ちてアルプス越ゆる尾白鷲	英子
マイスターなり「皇帝」を振る	玲
詰碁とはちよつと違ふぞ詰将棋	文伸
短気利かん気誰に似たるや	豊美
ほだされて靴すり減らす月暑し	健悟
湯上りの髪匂ふ姐さん	慎二
おもむろにふふめば至福貴腐ワイン真空	代々子
夢多くして足らぬ勘定	瑞枝
流れ来て光悦垣にかかる花	執筆
忘れ霜置く鄙のほそ道	

平成十二年四月二十五日 於 亀戸天神社

執筆を終えて

橋 文子

平成三年の藤祭りに、初めて正式俳諧を見学。まさか後年自身が執筆を務めようとは思ひもしなかつたので、天神様ご所蔵の「秋野の文台」の方に興味を引かれた。

昨年、明雅先生から「執筆」とのお話があり、先生ご秘蔵の文台「左沢」を扱わせて頂くのかと思うと身が震えた。一年余、とにかく、病まず倒れず、頂いたお役を務めねばと、頭の何処かに、いつもそのことがあった。最初のお稽古までの緊張が、一番大変だったように思う。万事なるべくゆつくり、後にも先にもたつた一人の転げ執筆の名を残さぬように、と心掛けた。しかし、歌膝に構え、「下手な字でご勘弁下さい」と筆を持つと、不思議に気分がゆつたりとした。名残の表からの付けは、宗匠方が時間を考慮して、甘く通して下さつたが、ご再考があつてもよかつたかなと思えるくらい余裕を持って運べた。お役のある時以外、いつも受付係で会場の外に居り、先輩方の立派な所作を拝見出来ずに来たので、お手本が目には散らつて萎縮するといふこともなく、「えい、ままよ」と自己流を通したので楽だったのかもしれない。

明雅先生はじめ、郁子様、和子先生、宗匠方、諸役の方々本当に有難うございました。

二十韻「藤影や」

東明雅捌

二十韻「菅公の晴」

秋山志世子捌

二十韻「潦」

井上鶴鳴捌

藤影や文台返し晴々と

真空

朗らかに聞く照鷺の声

明雅

昇進を乗込鯛で祝ふらん

弘子

遠き島より届く一升

文伸

つづらをり世阿弥の道に雲の峯

朱鷺子

涼しき月に序破急の舞

空

なかなか口説く言葉の見つからず

雅

名刺代りにキッス投げたり

弘

四気筒ジーブが残す砂煙

伸

初めて電映りたる包

朱

鑑定団金の屏風の水墨画

空

狸汁煮る方丈の鍋

雅

いそいそと尼は衣を着かへつつ

弘

覗かるる窓覗く三日月

伸

茨の実踏む道行の夢縫れ

朱

正倉院の曝涼の列

空

石は流れ木ッ端は沈むミレニウム

雅

逆転優勝悲願達成

弘

叙勲の栄うから囲みて花の下

朱

仔猫顔出す板塀の穴

伸

平成十二年四月二十五日首尾

於 亀戸天神社

連衆 福田真空 松原弘子 若林文伸

橘朱鷺子

菅公の晴たまはるや藤まつり

志世子

春を惜しみて伸び上がる亀

紀子

あんかけの豆腐菜飯を供すらん

好敏

銘柄指定たばこ買はせる

あかり

十六夜の迷ひまよひて猫小路

紀

すさまじきまで荒れし大門

敏

厚岸草流離はじめのソープ嬢

り

びびびの末の相思相愛

敏

風吹けば羽の丈ほど電気生れ

紀

ギヤマン製の天使ほほゑむ

同

アイスクリンスペイン広場の人混みに

り

方程式の暗号を掏り

紀

膨張の宇宙を解いて上る株

同

酒は「李白」そ月は寒月

り

絹ズボン粋なお方の細身なる

敏

くすぐったいのやめてちょうだい

り

悠々とジュゴンの親子泳ぐ海

敏

絵筆担いでタヒチへの旅

世

名曲の『花』百年を歌ひ継ぎ

敏

ぐうちよきばあと日永山道

り

藤浪や濃きも白きも潦

鶴鳴

太鼓橋より亀の鳴く頃

かりん

春障子少しずらしつ手をそへて

壽子

粗く描き込むデッサンの線

瑞枝

凍月に会費集める町会長

珠枝

軒の氷柱を刀代りに

壽

非常ベルハートの隅でなつてゐる

瑞

ひとり相撲にはたと気がつき

珠

直木賞最多落選作家なり

ん

キーポトルの薄きイニシャル

同

泊り船こいこいすれば虎が雨

珠

どくだみをもむ山伏の怪我

瑞

デラシネは父母未生の地探しゆき

ん

エデンの外にもやす情炎

瑞

汝抱く叢の上月傾ぐ

壽

劇場の中ちろ這ひ出す

珠

その昔どんぐりごまのチャンピオン

壽

松坂君もやはり茶髪か

ん

二十一世紀の花に応援歌

瑞

糊をきかせたシャツにこち風

壽

平成十二年四月二十五日首尾

於 亀戸天神社

連衆 登坂かりん 杉山壽子 大窪瑞枝

花巻珠枝

二十韻「穹蒼」

佐古英子 捌

二十韻「角の豆屋」

鈴木慎二 捌

二十韻「膝栗毛」

高橋豊美 捌

穹蒼も淡きひと色藤祭

英子

撫牛の瞳にとどく春光

健悟

焼き栄螺香り豊かに滾らせて

嫺

フランス綴ぢの詩集開きぬ

淳子

窓に揺るカーテンレース透かす月

昌子

爪磨きあゝる蠟座の女

克子

師に抱かれ未婚の母も厭はない

淳

いつの間にかやら入るウイルス

嫺

『あるじゃん』と臍くり隠す居候

昌

自動二輪に三人で乗る

悟

最果てのまたぎの村は静もりて

克

落選の日の父の詫び状

悟

うまい店あるよと云って酔ひつぶし

淳

ドあかんたれに咬す福耳

嫺

真夜中の月に真打ち誓ひけり

悟

蝶を抜きて秋袷着る

淳

鴟の啼く信濃国分尼寺の跡

克

喜寿と古希との兄弟の宴

悟

汐入りに流るる花を眺めをり

淳

茹でた玉子を分ける遠足

昌

*フランス語(お金)からとったネット

関連の蓄財情報誌

平成十二年四月二十五日首尾

於 亀戸天神社

連衆 佛測健悟 八代嫺 上月淳子

中野昌子 風間克子

藤まつり角の豆屋の味や佳し

慎二

連れ立ちてゆく長閑なる街

達子

春シヨール刺繍の糸のとりどりに

千恵子

クロスパズルのまだ解けぬ謎

恭子

月光に水母の限りなく透けて

千

灼ける砂浜拾ひたる恋

達

シゴロとは知れどハイミス気を許し

二

時は流れる質も流れる

達

末法に弥勒菩薩の在りとかや

千

斜めに世間見やる灰猫

同

熱爛に語りし父の今昔

恭

宇宙船内十八番シャンソン

達

葛紅葉かくれ遊びの屋下り

同

秋乾く窓唇の燃え

恭

冷まじき土俵の枝をCMに

同

噴ける有珠山湖に映る月

千

シーサーの相は無念の前総理

恭

眞実は閻医師は黙して

二

花の雲ゆつくり過ぎる飛行船

達

蝶舞ふ先は興業の里

恭

平成十二年四月二十五日首尾

於 亀戸天神社

連衆 篠原達子 鈴木千恵子 式田恭子

ゆく春や袖珍本の膝栗毛

豊美

雀隠れの印伝の里

順子

麗らかにホームページを開きみて

将義

ハミングしつつ歩むのは誰

一恵

くらべうま馬どめの銚照らす月

代々子

諸肌脱ぎの肩に刺青

同

立ち際にちらと湯文字の緋ぢりめん

恵

晩婚にしてはやも妊ごもり

順

万物のDNAを読み解かん

代

四十八ヶ所けふで結願

順

勝相撲醜名呼び上ぐ美声にて

代

竹の節より月の姫出づ

将

ゆらめきて不知火の恋燃えさかり

恵

別れの曲をピアノ連弾

代

古曆めくれば去年のスケジュール

恵

座敷童子と鯖酒を酌む

将

翼の灯きらめく先は紐育

代

皇帝ペンギン行列をなし

順

破れ垣に爛漫の花愛でし午後

豊

草の庵に届く草餅

将

平成十二年四月二十五日首尾

於 亀戸天神社

連衆 和田順子 川名将義 山崎一恵

橋野代々子

俳諧茶式を試みて

松本 杏花

芭蕉に、「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、その貫道するものは一なり」(「笈の小文」)の言葉がある。お茶に携わり、俳諧を学ぶうち、この両者を兼ね備えた一座建立ができないものであろうかと思案をめぐらすようになった。そんな折、俳諧の茶事の載ったある文献に出会った。茶事は通常二夕時(四時間)を過ぐべからずとされるが、連句はこの範囲でこなせる形式が選ばれる。準備に何かと時間がかかってしまったが、五月吉日、漸々に案内状をお出しする事ができた。

万緑や俳諧茶式満を持し 杏花

風炉の正午の茶事、場所は残心亭(拙宅)。午前十一時より。客は、健悟、淑代、しげと、盛興、蓉子の五氏。亭主 杏花。手伝い 社中の者三名。当日は絶好の日和で、露地渡る風も清々しく、筥をしたたる水に緑が映える。以下俳諧茶式(俳茶会とも)を試みる方の参考に進行のあらましと作品をご紹介します。

寄付き

掛物 大仙院桃林 喫茶去

花入 置籠

花 アジサイ ユウスゲの葉

客は身支度をして掛物を拝見、白湯を供さ

れた後、寄付きで表六句まで進める。

打水の奥の俳諧浄土かな

健悟

鉄線かづらはどよきを挿す

杏花

備前の山はやさしくなだらかに

しげと

一輪車こぐ子の後につき

淑代

有明の枝舎でピアノ復習ふ人

盛興

挿み太郎のすがる窓の辺

蓉子

膝送りで障りなきことを確かめ、各々懐紙に墨書する。蹲いで手、口を浄め席入りする。

席入り

掛物 墨蹟一行物「山は山水是水」

釜 切合わせ丸釜

風炉 鉄鬼面風炉

床と釜を拝見して席に付く。

炭手前 社中

香合 紫檀扇面蝙蝠図

香 白檀

炭を継ぎ香を薫いて湯相を調える。

懐石 京懐石「今昔」

酒 杏花村汾酒

菓子器 利休好縁高

菓子 調神社「宮うさぎ」

酒は今年二月山西省の旅みやげで、この日の為に用意しておいたもの。杏花村で造られる芳醇な酒である。

中立

再び寄付きにて裏の三句まで進める。

風炉名残みやげの汾酒振舞ひて 杏花

なほまなうらに糧へる何 健悟

掛けてみるゴッホの描いた長椅子に 淑代

後座

掛花入 備前

花 鉄線かづら

桐木地三木町棚

水指 染付 佛淵健悟

濃茶 手前 瀬戸

茶器 間道

仕服 萩

茶碗 銘小倉山 詰小山園

薄茶 手前 社中

茶碗 如心斎好櫛型眞盆

薄茶器 堆朱

唾八百を百も承知て しげと

邪魔者は快刀乱麻切つて捨つ 蓉子

所払いの彼を追ひかけ 盛興

志文の代筆をする聖夜なり 健悟

遠嶺かすめ渡る寒月 杏花

サーカスのピエロ独りで鏡取りをしげと

さいたまの名で聞かれる街 盛興

やうやうに神代曙花をつけ 淑代

円座のまなかあられ菱餅 蓉子

平成十二年五月二十九日 首尾 於 残心亭

退席

英語連句の試み 花鳥風月(十四)

浅賀 淑代

入相のひゞきの中やほとゝぎす 羽紅

(『猿蓑集』巻之二 夏)

この蕉門女流俳人の句に次のような英訳があります。

The nightingales sing

In the echo of the bell

Tolled at evening.

(Kenneth Yasuda "The Pepper Pot")

ほととぎすは古来日本人に馴染みの夏鳥でカッコウ目カッコウ科。昼も夜も鳴き、あやなしどり、夕影鳥、夜直鳥等の名があります。英語では little cuckoo。一方 nightingale は、スズメ目ヒタキ科ツグミ亜科の鳥。さよなきどり、夜鳴き鶯の和名が当てられ、どうやらほととぎすとは別の鳥のようです。訳者が訳語に nightingale を選択したのは何か子細があったかもしれない、ing の韻の響きも何やらゆかしい・・・と、そこにも関心は向くのですが、今回話題にしたいのは、ほととぎすが複数に表現されていることです。

例のように、母語を日本語とする者だったら、おそらく単数を選択するであろう対象が複数形とされるケースがしばしば見受けられ、英語的発想のひとつであるうかと興味をひきます。もう一例。

稲妻にこぼるゝ音や竹の露 蕪村

(『蕪村句集』巻之下秋の部)

A flash of lightning !

The sound of dew

Dripping down the bamboos.

(R.H. Blyth "Haiku")

竹は一本か複数か?・・・仮に the bamboo と単数で表現されたならば、句の印象はどう変わるのか? 複数によるイメージの方が英語を母語とする人々にとって、より自然、象徴的、あるいはより詩的なのであるうか? さて「ねこの子」は、鈴木慎二さんが和英両語の付合を試みて下さいました。「考えること自体存外に楽しい思いを味わいました」とのコメント、有難うございました。

材1 夜話は第二次世界大戦史 かりん

材2 イあつけらかんと彼女独酌 慎二

she is drinking alone //

who doesn't turn a hair //

口南北サミットマジックの壺 慎二

north-south Summit, //

I'm afraid to be a pot of magic

今回はご紹介に留め、付句の吟味は次回に。

* 連句と酒 *

「髭の男」

今宮 水壺

二十代の頃、絵の一仕事が終わると、中野北口の小さな居酒屋で時々英気を養っていました。ある日、まだ宵の口で客は私一人、ちびちびやっっているところへ四五人連れの客が入ってきた。何かの会合の帰りらしい。声高に話しているのを聞くと、もなしに聞いていると、どうも将棋に関するところらしい。その頃将棋連盟が中野にあったので、そこでの会合からの帰りだったのか。ひとしきり続いた言葉のやりとりがおさまると、何か唄のようなものが始まった。私の隣の客だ。すぐ浪曲だと分かったが、始めの一節が終ったところで「よう」と合いの手が入ると同時に私の左肩が何かでポンと叩かれた。ひよいと見ると、扇子を手にしたいかつい髭の男がにやりと笑った。将棋九段、名人位にいたこともあるへ鬼の升田幸三でした。いたずらっ子のような顔に見えました。

◇ 猫養会案内

○ 猫養会 江東区芭蕉記念館

日時 十月廿七日 十二時

正式俳諧の後二十韻興行

○ 「猫養作品集 X」残部あります。

〒二七七〇〇五

柏市加賀二一二十一

梅田利子 宛

〈 新刊紹介 〉

『沼辺燦燦』下鉢清子著 朝日新聞社

¥2600

サブタイトルは「手賀沼に魅せられた文人の俳句」 千葉県北西部にある手賀沼と身近に過ごしてきた作者は、沼の冬の風情は殊に好きであると書いている。手賀沼に惹きつけられた文人として最初に紹介されるのは北原白秋とどん底時代を共にし、数奇な運命を生きた江口章子。他には村上鬼城や前田普羅など、困難を生きた俳人たちへのあたたかく深い眼差しに、俳人としての作者の詩精神の在処が伝わる。

祭甚句恋唄つづりつくしけり 清子

連衆心の復活・返信

日高英二

明雅先生、

二十韻「言霊も」の巻について早速ご批評ご感想を賜り有難うございました。この作品についてのご評価や、また連衆心を復活させ「膝送り」の方式を見直すべきだとのご見解については私もまったく同感です。ですからお手紙の趣旨に付け加える新しいことは何も持たないのですが、先生の言葉に触発されて少し愚見を述べてみます。

ご批評の中に、「前句は打越を立て、付句は前句を立てて、全体が協力して纏った作品を首尾しようという意志」という言葉が見えますが、この「前句を立てる」というのはまことに旨い言い方です。このことこそ協力して詩作品を創ろうとする連衆心の核をなすものであると思います。句いと言い移りと言い響きと言うも畢竟このような精神的態度の上にはか実現しないものです。たとえどのような前句であっても、それを味読し共感し、それと付句との間にひとつの詩情を創り出す努力こそ連句の喜びであり醍醐味であるといふべきでしょう。

座に集う人は誰しもこの連衆心を抱いているに違いありませんが、人間は複雑で矛盾した生きものです。孤独の中で友を求める人も

集団になるとすぐに優越感を求めます。深層心理学ではこれを優越感コンプレックスと呼び、仏教心理学では「慢の心所」と言います。このコンプレックスにあるエネルギーが、良い意味での野心とか競争心を通して働く時には座を活気づかせ弾ませることになりますが、行き過ぎる場合には作品の流れや連衆心に対して破壊的に働きます。句の新奇を競ったり銜ったり、句上げの数を誇ったりする心裏には必ずやこの優越感を求める煩惱が働いているものです。芭蕉さえも「ある時はすむで人に勝たんことをほこり、是非胸中にたたかうて、これが為に身安からず」（笈の小文）といった時代がありました。そして深川隠棲後「風雅の誠をせめ」続けた苦闘の中には、この煩惱と連衆心に対する深い省察も含まれていたと思うのです。

蕉風の盛期後期傑作群において「膝送り」が多用されているのもおそらくはそのような省察から汲み出された配慮に違いありません。「出勝」にもその良さがありますが、われわれもまた連衆心に思いをいたし、「膝送り」の効用を反省してみる時期かもしれません。

六月十七日

日高英二 拝

【Q】 連句の時、一巡の最後の方になると頭の中が真っ白になり、早く出さなければと思いつかえって出来なくなります。いい工夫はないでしょうか。

【A】 人によって速吟の方も居られ、遅吟の方も居られ、大方は個人・個人の性格・能力・才能・感性など、先天的なものによるものでしょうが、それだけではなく、その人の修練によって左右されるところではないでしょうか。

この修練という言葉は、「去来抄」に出てきます。

綾のねまきにうつる日の影

泣く泣くも小さき草鞋もとめかね 去来

この前句が出て、一座の人々は暫く付け悩んでいた。この時、芭蕉先生が「この句は身分の高いご婦人の旅であろう」と言われた。それで私はすぐにこの句を付けた。その座に居た坂上好春（貞門の俳人）は、「貴婦人の旅と聞いて、忽ちに句が出来たのは、さすがに蕉門の人々の修練は格別なものがある」と感心した。

この座の去来は別に一巡の最後になってい
たわけではないでしょうが、ともかく、俳席
で出句に詰り、追いつめられた場合にあって

事は同じです。そのような場合、捌きの芭蕉が作句のヒントになるような事を与えたという事も、見習うべきことでしよう。

しかし、連衆にとつては、芭蕉が出したヒントを即座に活かした去来こそ見習うべきで、好春によれば、それは去来（去来をはじめ蕉門の一統）の格別な修練の結果だと言うので

す。
修練とはどういうことをするのでしよう。句の修練はいろいろな方法があり、広く言えば行住坐臥、すべて連句修練でないものはありませんが、最も具体的に効果的なものは、暇にまかせて独吟の歌仙を作り続けるという事でしょう。一卷首尾すれば大分自信がつく事でしょうし、五巻・十巻と首尾すれば、もう俳諧の席に出て、一巡の最後に近づいて頭の中が真っ白になる事もなく、捌きのヒントにも的確に迅速に応ずる事が出来るでしょう。

もつと簡便な方法としては、すくなくとも当日の前に、当季の発句で表六句だけでも作っておく事です。もちろん、作っておいたものをそのまま無理に付けようというのは、ポケットまたは手帳の句と言われ、実感を伴わない句として嫌われますが、すくなくとも付句のヒントにはなるわけで、一巡の最後になっても、頭の中が真っ白になる事はないと思います。

◇ 猫蓑発展基金ご協力有難うございます。

一口 卯の花会

五千円 松本杏花

(敬称略)

◇ 基金の口座 富士銀行新宿西口支店

普通3376045 猫蓑基金

.....S.....S.....

あとがき

○ 過日、久しぶりに点前をする機会があった。ころものたてはほころびにけり・・と、袴など大分あやしくなっていたが、やり始めるとそんなことも忘れてしまう。

つくづく思ったことは、茶事は客の胃袋と頭をびっくりさせない「序破急」の心遣いがよく考えられていることである。連句の作法も多分同じ気持ちから発していたのではないだろうか。

○ 例年になく暑さがキツイこの頃です。皆様お大事に。

季刊 「ねこみの通信」 第四十号

発行者 猫蓑連句会

編集人 町田市金井6-7-16 佛淵健悟

〒一九五〇〇七二

印刷所 アトリエ・Neko